

昭和の南海地震体験談

氏名: 浜 泰夫(はま やすお)

生年月日: 昭和 3 年 5 月 8 日

地震を体験した場所: 串本町

当時の家族状況: 母、兄(5人)、姉(2人)、弟(2人)、妹(1人)



1) 地震発生時の状況

昭和20年6月、18歳のとき、大阪で学徒動員中に空襲に遭い、郷里の大島に戻った。8月15日に終戦になり、同月31日付けで大島港前の農協に就職した。当時の農協は木造で大島郵便局から県道を挟んで前側の1階が売り場で2階が事務所になっていた。

その一角に宿直室を造っており、専門の宿直員でもあった。南側は米や肥料の倉庫になっていた。

当時の大島港の海岸沿いは埋め立てられておらず、砂場で遠浅になっており、道までの高さは3mほどで、近くには巡航船の棧橋もあった。

地震発生当日、いつものように宿直していたときに、夜中の4時頃だったと思うが、突然強い揺れがあり、すぐに目が覚めた。座ってられないほどの強い揺れで、もちろんすぐに立ち上がることも出来なかった。

間もなく近くの床屋(農協の裏)の3人姉妹とその母親が宿直室に逃げて来て、恐さのあまり泣きじゃくっていた。彼女たちの父親は沖に漁に出ており、家には女手だけだった。

宿直室から外に出ようと思い、ガラス戸だから簡単に開くと思ったものの、揺れている最中は開けることができず、思わず手を切ってしまった。

東南海地震を大阪で経験していたので、地震のあとは、津波が来ることを知っていた。真っ先に床屋の家族は床屋の前の小路を通って、蓮生寺まで避難したのだと思う。

自分は農協の書類を一人だけではどうすることも出来ないのも、せめて米だけは濡らさないようにしようという気があったので、米の倉庫、といっても戦後で10俵程の米しか入っていなかったが、若い衆に寺まで提げさせても2~3俵しか運ぶことができなかった覚えがある。

そうこうしている内に、家に兄の子供が4人いたこともあり自宅が心配になり、農協をそのままにして、家に戻った。その途中で1~2軒だけ石垣の塀が崩れていた。

2) 津波襲来時の状況

大きな津波が来るという予測で、家族だけでなく、7~8軒の付近の人たちも引き連れて、県道の奥、高い所まで避難した。

そのときにゴーッという物凄い音で、波が田代港に向かって、捲くし立てて来る様子を感じることが出来た。津波を実際見たわけではないが、波は5m程の高さで、県道と海岸に挟まれた通称小学校へ行く道（北は現在の(株)ニシチフカから南は田代停留所あたりまで)にぶち当たったようだ。



現在の田代港

海拔より5m低いところにあった民家や倉庫が浸水や流されるなどの被害に遭った。逆に大島港の場合は、津波は来るときはひたひたひたと上がってきた。

大島港から蓮生寺までは緩やかな上り坂になっており、波を見ながら逃げることが出来た。その代わり、引いていくときはサーッと引き方は速かった。波は大きなものではなかったが、2～3mの高さだったと思われる。

津波は橋杭岩の前を東から西に須江に向かって大島を囲むように進行したと聞いている。津波は3～4波ほど来たと思われるが、1波より2波のほうが酷かった。

3)家族の行動・被害

家族総出で、すぐに県道の上まで避難したので、誰にも被害はなく、自宅もたいした家ではなかったが、倒壊を免れた。

4)集落・周囲の被害

主に被害があったのが漁業組合で、倉庫も流され、田代湾口にあった数件の民家と水産加工所も流された。

総数では民家と倉庫を入れて、20件近くが流されたことになる。地震による家屋の倒壊はなく、塀や納屋が壊れたくらいだった。ほとんど男の働き手は当日、沖に漁に出ており、特に若い衆は村にはいなかった。

寺に避難した人は、夜が明けるまで寺に留まったが、余震があるたびにそこへ避難することになった。幸い大島で津波で流された人や、亡くなった人は一人もなかった。

5)地震・津波後の生活

流された民家の人たちに国や県からの支援や補助はなかったと思われる。

戦争に負けて翌年の事でもあり、国家組織が十分に機能していなかったはずである。

大島人の気質を見ると、皆一致協力して、流された家屋の人たちに奉仕や寄付をして再建に助力したと聞いている。

田代港で流された民家や倉庫の修復に多少時間が掛かったのは、被害にあった教訓から、用心が先行したからである。

戦後で食料がないのが当たり前の時代で、地震や津波の後だからといって、食糧そのもの

に特に影響があったわけではない。米の配給は一人につき最低一日2合1酌で、31日のうち米3日で、あと28日が代替物(芋、小麦粉、うどん粉、砂糖)であった。よって米の飯はなく、おかゆか代替物が主食であった。却って戦争中の方が食べ物があったように思われる。金のある人だけが闇で購入した米を食べることができた。但し、大島は漁所だったので、魚と鯨は十分に食べることが出来た。

6)次の災害への備え

区長の時代に災害対策本部を立ち上げ、次の災害時に、すぐに利用できるよう、防災用具等を備蓄している。避難経路は蓮生寺等が指定されている。

高齢者に対しては、誰がどの高齢者を避難させるかも決めているが、実際はうまく機能するかどうか。堤防も防壁が高くなったので、ある程度波を防ぐことができる筈である。田代湾そのものは鉄筋で固めたため、頑丈になっている。

又、大島は石垣が多いので、地震の際、蓮生寺に上がる石段の崩壊も想定されることから、今後対策をどう講じるか課題も残る。